

“海のふるさと館”を黄金岬に



海のふるさと館完成予想図

海洋都市を めざして

「海と大地に未来を創造する都市」ロマン萌ゆる
マリノポリス留萌」として、マリノポリス—海洋都市—を新しいまちづくりの大きな柱とした留萌市第三期総合計画が、今年からスタートします。こうした海洋都市づくりに向けて、海洋開発の前線基地・

いま、黄金岬から21世紀 への序曲がはじまる。

海洋性の観光基地として整備が進められている黄金岬の高台に、「海のふるさと館」の建設がはじまります。新しいまちづくり「海洋都市」に果たす「海のふるさと館」の役割について、考えてみたいと思います。

マリノポリス—海洋都市—と言えば、海洋技術を中心とした海洋開発だけが強調されがちですが、海洋性観光レクリエーションをはじめ、産業、文化、生活すべての面に、ゆとりあふれた地域の新しい顔をつくり、生活の充実を図ることを目標に海洋資源と地域文化を結んだ高度産業都市づくりをめざしているのです。

「海のふるさと館」は、資料館としての文教施設ですが観光地でもある地域性を考え展望ラウンジ・レストラン等の施設を備えたものになります。資料館としては、展示室のほか体験学習室研究室、収蔵庫、作業室、会議室、事務室等があり、市民の学習活動や文化財の保存を行うこととなります。

海のふるさと館のあらまし

①日本海の誕生と留萌②日本海と自然③古代の海の民④北前船の時代⑤留萌港物語⑥新しい日本海時代の到来⑦対岸のともだち(ウランウデ)の

とくに、常設展示室では、総合テーマ「海と人びと」に基づき、

陽を眺めることが出来、さらに公共施設としてはじめて身障者用のエレベーター・トイレを完備し健常者と区別なく施設をご利用いただけます。

留萌市の名勝地・黄金岬に建設する「海のふるさと館」は、資料館としての文化施設ですが、展望施設などを持ち名勝地の観光施設としての機能も考えに入れた、留萌の新しい「文化・観光の顔」として、来春の開館に向けて建設がはじまります。

このためには、海と調和するまちづくりをめざし「海を理解し、海に目を向けた」留萌の将来像をみながら考え実現していく必要があります。

「海のふるさと館」は、このような海を理解し、将来の

国からも特別な資金援助

「海のふるさと館」建設事業は、昭和六十二年に自治省の「地域経済活性化緊急プロジェクト事業」に指定されました。

この事業申請は、全国各市町村から出された数多くの事業の中から選ばれ、事業の成果が地域の活性化に期待出来るなどの事業効果が認められた事業指定されたものです。

この事業に指定されたことにより、事業のために借りた起債の返済に必要な元利償還金を完済するまで、毎年約四二八〇程度のお金が国から援助される利点があり、さらに北海道からも、この事業に対して補助金が受けられるよう話し合いを進めています。

黄金岬の再開発の重要性和そこに建てられる「海のふるさと館」建設事業の果たす役割が、国からも妥当なものとして認められたとも言えます。

海洋都市は「海を視点」にした産業・観光・文化・生活の充実

「海洋都市」のまちづくりは、海洋資源と地域文化を結んだ高度産業都市づくりにあります。

このことは、ただ単に技術的な海洋開発だけでなく、産業、観光、文化、生活すべての面にゆとりあふれた地域の新しい顔づくり、産業を振興めざす「戦略プロジェクト」の推進が計画されています。

海を視点にしたまちづくりは、いろいろな計画として進められています。



塩見・三泊地区整備構想図

その視点は「海」であり、今年から始まる第三期総合計画でも「市民生活にとけこんだ港のあるまち、母なる海といわれている日本海、この海と未来の展望をこめて二十一世紀のマリノポリス・留萌をめざす」戦略プロジェクトの推進が計画されています。

海を視点にしたまちづくりは、いろいろな計画として進められています。

海の特性を生かし観光都市づくり

海水浴場にかけての海岸線一帯を、施設整備等によって新たな観光ゾーンとする計画や、留萌新港に伴う塩見地区や三泊埠頭を緑地とレクリエーション地帯にする計画が進められ、留萌港の南岸にも親水地域としてのレクリエーション施設を計画するなど、海と調和したまちづくり計画の準備が進められています。

留萌市は、いま海の特性を生かした特徴ある海洋都市として二十一世紀に向かうとして進んでいます。

留萌市海洋開発都市構想から—土地利用構想図—

